

【研究ノート】

詩の暗さ

——ヘルダーリン、リルケ、ツェラン

神子博昭

前回は「自然に」生きた詩人として、ゲーテ、アイヒェンドルフ、メーリケの三人をとりあげました。

きょうは、生きることがなかなかむづかしかった三人の詩人を取りあげましょう。ヘルダーリン（一七七〇—一八四三）、リルケ（一八七五—一九二六）、ツェラン（一九二〇—一九七〇）ですが、三人とも、生きること、自分がいま、ここにいることに、違和感をおぼえ、うまく周囲の世界となじめなかつたひとたちです。生きるとは、自明のことではなかったのです。ときには、この世界をこえたところへ、あるいは別な世界へとびこみたいと思ったこともあるひとたちの詩です。

たとえばヘルダーリンには、完成しませんでした、エムペドクレスを主人公にしたドラマがあります。エムペドクレスはエトナ山の火口に身を投じたという伝説のある古ギリシアの哲人ですが、ヘルダーリンは、このエムペドクレスの死にたいする熱望に、大空と大地と、ひとつになろうとする陶酔を見ます。そしてその死を、同時に、その故郷アグリゲント市の宗教的なよみがえりの根源にしようとするのです。ここには、いま生きている限定された世界から解放されたい、と

いう激しい望みがうかがえます。

またリルケには、有名な「世界内面空間」という発想があります。これは記憶の空間です。いままでに詩人リルケが出会い、あるいは聞き知った、すべての事物、ひと、出来事などが、生死の境をこえて、この空間には生きているのです。現実にはどうしても得られなかった、あるひと、あるものとの生きた出会いをはたした、という実感が、この空間ではじめて得られることになります。

ツェランは、たくさんの死者の記憶をかかえています。父、母をはじめ、知人、友人のみか、ユダヤの民族の死者のすべてが、ツェランにおいて、思い出として、生きかえることを求めています。ツェランと死者とのつながりは、死者への親しさといったものをこえて、ツェラン自身を、死の領域へとひきこんでゆくことになります。

生きることが自明のことではなかったこうした人たちの詩は、やはり、読むのに苦勞することになります。三人の詩は、いろいろな意味で、少し暗いのです。

一、パンとぶどう酒

一八世紀の半ばころから、ドイツでも古ギリシア熱がたかまります。ヘルダーリンも古ギリシアには大きな関心をもち、理想の国、理想の時代ともみなすことになりました。

ヘルダーリンは古ギリシアになにを見たか、いろいろな面がありま
すが、いちばんの中心は、自由で、しかも敬虔な信仰心によって結ば
れた神々と人間たちとの、理想的な共同体であったでしょう。自分の
生きている社会と時代には、それは欠けているとみなされます。古キ
リシアと現在の時代との分裂は、橋わたしするにはむつかしいほどの
大きさになります。理想には達することができない、しかし現在の時
代はうけいられない。――

どうしたら、この両者を関係づけ、結びつけることができるか。そ
の試みに正面からとりくみ、そして以後のヘルダーリンの道筋をえが
きだしたのが、この長大な悲歌『パンとぶどう酒』です。

詩の枠組は、三部構成です。

さいしょは、現在の時代。これは夜の時代です。ついで、記憶と想
像のなかに古ギリシア世界があらわれます。これは昼の光にてらされ
た世界です。そしてさいごに、ふたたび現在の時代に帰ってきますが、
そのときには、夜が昼と結びつけられているのです。この結びつきの
要諦は、夜とみなされた現在の時代が、「聖なる夜」ととらえかえさ
れるところにあります。そのうえで、聖なるしるし、「パンとぶどう
酒」が古ギリシア的に、同時に、キリスト教的に、二重に意味づけさ
れることになります。

とくに見事なのは、さいしょの三節です。

ひっそりと街は静まる。灯のともされた小路にひと気は絶え

松明を飾り馬車のひびきは遠ざかる。

昼の楽しみにもひと倦み 憩いをもとめて家路をたどり

得失をかぞえ賢しい頭は

家にくつろぐ。ぶどうも花もとりかたされ

手仕事のいとなみの跡とてなく 広場のざわめきもいまはとだ

える。

ふと弦の音が遠くあたりの庭からひびきます。おそらくは

愛するものがつまびくのか あるいは孤独な男が

遠方の友をおもい青春の日々をしのぶのか。泉は

絶え間なくあふれ ひたひたとかぐわしい花壇にここちよい。

夕暮れの大気のみか ひっそりと鐘が鳴り

数を呼ばわり夜警が時をふれまわる。

いま風がち 杜の梢をひそかにゆるする。

見よ！ われらの大地の影の姿 月も

しのびやかにたちのぼる。陶然たるもの 夜がきたのだ。

星々に満ち われらのことなど気にとめぬ顔に

目を見張らせ ひとの世にあり見知らぬものが

山のかなたに悲しげにまた壮麗にたちのぼり輝きわたる。

街にはひと気がなくなります。馬車も走りさり、市場もかたづけら
れます。ひっそり静まりかえった暗さのなかに、かすかに弦の音、泉
の水音がひびきだし、鐘が鳴りだします。風がそっと吹きおこると、

夜の街をゆくものは、足もとや家壁が明るくなったことに気づき、ふと目をあげる、あるいは、ふりかえることでしよう。いつしか、だれひとり知らぬ間に、月がのぼっていたのです。夜がかすかに輝きをはなっているのです。この月の明りに気づくところが、この長大な詩の、いわば入り口です。ひとはだれも気づきませんが、夜はひそかに輝きをはなっていたのです。「陶然たるもの」といわれています。夜は地上に生きる人々のことなどには関心をはらわず、ひとり輝きをはなつようです。この夜は生きています。しかもひとの力をこえた時空として、またそこにひそむ力として、生きています。

はかり知れぬのは高貴なるもの 夜のめぐみ だれひとり

そのめぐみをうけてなにごとか またいつからおこるか知る由もない。

そのように夜のめぐみは世界をうごかし ひとの魂を希望でゆるがす。

賢者にすらその配慮はわからない。というのもそれこそ 神の あなたを愛してくださいさる至上の神の意志なのだから。それ

ゆえに

思慮ある昼こそ夜よりもあなたには好ましい。

しかしそれでもときおりは明晰な目も影を愛し

必要となるまえに楽しみに眠りをもとめましょう。

もしくは誠実な男子であれば喜んで夜に見入りましょう。

まことに夜には花輪をささげ 歌をおくるのがふさわしい。

なぜなら夜はふみ迷うものや死者にこそ神聖なものではある。

だが自らは永遠に自由な精神を生きているのだ。

しかしまたその夜が 時の歩みもためらいがちに

闇のさなかにわれらの住むとき 心のよすがとなるようにと

忘却と聖なる酔いとをめぐんでくれる。

ほとばしっては愛しあうものらのごとく

眠らずにあることばをめぐみ なみなみあふれる杯とおどりの

命とを

さらにまた聖なる記憶をめぐんでくれる 夜に目ざめてあるよ

うにと。

wunderbar「はかり知れぬのは」ではじまる二行には、ふともれで

る息の深さがあります。だれひとり、夜のめぐみには気づきません。

詩の語り手／うたい手も、いま、はじめて、そのことに思っていたようです。闇のさなかに任んでいて、いっさいの聖性を失ったと「われら」は思っていたのですが、それはただ「われら」が夜のめぐみに

気づかなかっただけなのです。夜は現在の闇の忘却と聖なる酔いとを、ことばと聖なる記憶とを、めぐんでくれるのです。その酔いと記憶に

せきたてられ、一種錯乱を思わせるほどの熱狂にかりたてられ、想像は古ギリシアへとんでゆくことになります。

ちなみに、ここで「あなた」といわれているのは、ヘルダーリンが

この悲歌をささげたハインゼという先輩の詩人です。

いかに深く心のおもいをひそめても ひたすら

われら 巨匠も子どももはやるおもいをおさえても 空しい。

というもだが

さまたげよう だれが喜びを禁じよう？

神々しい炎も昼となく夜となく急きたて駆りたて
あらわれでる。いざ 来たれ！ ひらかれたものをこの目で見る
のだ。

われらのものをさがすのだ それがどれほど遠くであろうと。
ひとつのことはゆるぎない。真昼であれ もしくは

真夜中のことであれ いつでもひとつの尺度がある。
だれにでも共通で しかも一人ひとりに固有のものが。

いずこへなりとだれもおもむき また帰ってくるのだ。
それゆえに！ 歎呼する錯乱は嘲りをあざけりかえず

聖なる夜に突如歌びとらをとらえながら。

それゆえに 来たれ コリントス・イストモスへ！ かなた大海
のとどろきわたる

パルナッソスの山すそへ 雪きらめくデルポイの岩山へ
そこオリュンポスのそびえる国へ キティロンの高みへと

唐檜のもと ぶどうのたわわに実るところへ そこからは
眼下にテーバイ そしてイスメノスがカドモスの里をせせらぎく
だる。

その地から来るべき神はきて舞いもどるよう招くのだ。

現在という夜は、聖なる夜なのです。めぐみにあふれた夜なのです。
聖性はかくれひそんでいて、ひとが気づかないだけなのです。そして
古ギリシアの世界とは、その聖性がひとに「ひらかれて」あった世界
でした。昼も夜も、どちらも聖なる世界であるからには、それに気づ
いたひとは、自由にいて、また帰ってくる事ができるのです。一
人ひとりに固有でありながら、しかも共通な尺度があるのですから。

こうして古ギリシアの世界へとびこんでゆくわけですが、この熱狂
は、六節目の半ば、回想の頂点で突如、中断されます。

だがいまはどこにある？ どこにあの名だたるもの 祭りの冠は

花ひらく？

テーバイはしおれ またアテナイも。武具はもはやびかぬか
オリュンピアに 戦車競技の黄金の車も？

コリント船が栄冠で飾られることも はやないか？

なにゆえに口をとぎすか 古き聖なる劇場は？

なにゆえに奉納の舞踏はたのしまぬか？

なぜかつてのように男子の額をひとりの神がしるしづけ

射当て 打当て 刻印をおし給わぬか？

そしてこの回想は、つぎの二行でとじられます。

もしくは神御自身があらわれ給い ひとの姿で

天上の祝祭を完成し 慰めもてとじ給うた。

この二行はなにげなく書かれているように見えますが、かなりデリ
ケートです。たとえてみれば、夢のなかで、確信をことばにだしてい
るおもむきです。目ざめて、その確信を点検してみれば、なぜ確信で
きたのか、いぶかしく思うでしょうが、しかし、確信をえたという自
覚だけは、はっきりとのこっている。そんな印象をあたえる二行です。
ここは、イエス・キリストを古ギリシアの文化と宗教、精神世界の
最後の神と位置づけているのです。イエスは古代ギリシアの末尾を飾

る神なのです。

はじめてこの詩をドイツ語でとおして読んだとき、この発想の意外さより、むしろ古ギリシアとキリスト教世界とをひとつに結びつける構想の大きさに茫然としたことを、よくおぼえています。詩で、こんなひろがりを作ることができるのか、と驚嘆しました。もちろん学問としての歴史学から見たら、正確でも真実でもないでしょうが、人間の発想と観念の豊かさ、そしてなによりも開放感、いまでも読みかえすたびに感じられます。

すなわちしばらくまえのこと われらには遠い昔におもえるが

天上の皆さまは去り 命を祝福するものがいなくなり

父なる神もひとの世から面をそむけ

当然のことながら悲しみの地をおおったとき

そしてさいごに静かな霊が天上の

慰めをもたらし 昼の終りを告げ消え給うたとき

かつており ふたたび帰る

しるしとして 天上の合唱はいくつかの贈りものをのこしてい

った。

それをわれらはかつてとひとしく なおひとにふさわしく愉しむ

ことができるのだ。

というのも精神をこめた喜びとして それ以上のものはひとの

もとは

あまりに偉大になりすぎた。しかもいまなお強いものが欠けて

いる

最高の喜びをうけるためには。だが感謝は静かに生きている。

パンは地上の実り しかし光の祝福をうけて育つ。

そしてぶどう酒の喜びは雷神に由来する。

それゆえパンをくらい ぶどう酒をたのしむとき天上の皆さまを

われらはおもう かつて

おり 時を選びまたあらわれる皆さまをおもう。

ヘルダーリンにとり、理想の古ギリシアと現在のキリスト教世界とが、橋わたしされる可能性が見えてきたのです。「パンとぶどう酒」という象徴が、古ギリシア的に、自然の聖なる力のめぐみとも解され、また当然、イエス・キリストの肉体と血のしるしとも解されることになり、現在でも「パンとぶどう酒」というしるしをおして、古ギリシア世界と結びついている、そう考えることができるのではないかと、ヘルダーリンは思うのです。そして詩人は、古い時代の記憶を心に、また昔からの神性のしるしをもとめて、くにからくにへとさまよいあるく、いわば「門づけ」だということです。

・・・それまでは よくおもうが

寝ているほうがましであるか 志を同じくする友もなく

ひたすら待ちこがれているよりは。こうするうちにもなにをなし

語るべきか

わたしにはわからない この乏しい時代になんのための詩人で

あるか？

しかし そうあなたはいう 詩人は酒神の聖なる司祭のごときも

の

聖なる夜をくにからくにへさすらうもの。

この詩をしめくくる「シリアびと」、イエスの姿は、こうえがかれ
ています。

しかしそうするうちにも松明をかかげ 最高者の

息子 シリアびとが影のくにくだってくる。

いまは亡き賢者もそれを見る。微笑すら囚われの

魂にかがやき 光を目にし涙もあふれる。

おだやかにひそやかに地の腕のなか巨人は夢見 さらに眠る。

ねたみ深き冥府の犬 ケルベロスさえいまは飲み いまは眠る。

いまは暗く、おそろしい力のうごめく時代ですが、「パンとぶどう
酒」の力により、冥府のおぞましい番犬ですら、眠っているのです。

ここには、不安げでもあり、胎動を感じてもいる現在の意識のありよ
うが暗示されています。

古ギリシア世界と現在のキリスト教世界とをひとつに結びつける手
がかりを見つけたヘルダーリンですが、御想像のとおり、これはまっ
たく異質な世界です。ただヨーロッパとは、この二つの異質な世界が、
これまたまったく異質なゲルマンという地盤に移植されて成立したわ
けですから、古代ギリシアとキリスト教の接点を探るといえるのは、ヨー
ロッパとはなにか、という問いの中心ではあるでしょう。

それにしても、その二つの異質な世界と信仰とを、ひとりの人間の
心において、矛盾なくおりあわせるというのは、かなりむづかしいこ
とでしょう。そのむづかしさと、悲哀と、切実さとを表現したのが、

『類なき者』という詩、とくにその初稿といわれているものです。

(一六)

巨匠にして主よ！

おお わが師よ！

なにゆえにあなたは

離れていたのか？ そして

わたしが古代の世界で

英雄や

神々の皆さまにたずねたとき なぜあなたは

不在であったか？ いま魂は

悲しみでいっぱいだ。

天上の皆さま自身嫉妬でもなさるのか

わたしがこちらに仕えれば

あちらは並びたたぬありさまなのだ。

この詩の底をながれる、静かな悲しみの調子は独特なものです。

『類なき者』は、とうとう完成にまでいきませんでした。草稿が
のこされただけであり、そのため、どの語句をとり、どれをすてるか、
またそれらをどのように結びつけるか、研究者によって意見がわかれ
ます。

わからない部分が多いのですが、たいへん独特な詩想がこころみら
れていますので、少し触れてみたいと思います。

この詩のひとつの主題は、さきほど述べましたとおり、二つの異質
な世界と信仰とを詩人の心のなかで、むりなくおりあわせることのむ
づかしさです。

もうひとつの主題は、というか、その主題の背景になっているものは、死に急ぐ人々の、性急なあこがれです。「すなわちいつも歓呼とともにこの世は／大地から逃れさり 地肌を／むきだす それをとめる人間らしさのないときは」といわれています。「野放図なものをしかし／神は憎み給う」のです。

そして、これがふたつ目の主題ですが、その激しいあこがれを静める神の姿です。ひとりにはバッカス、もうひとりにはイエス・キリストです。

少し理解しにくいことですが、こういうことです。人間は神へのあこがれにとらわれると、神とひとつになろうとして、死に身をゆだねやすい、とヘルダーリンは見ます。とくに変革の時代には、そうです。多くの熱狂的な犠牲のもとに、古い価値がしりぞけられ、新しい価値観がうちたてられます。人間は燃えやすい紙のように、死に近く生きているのです。しかし人間は、この地上にとどまることが必要なのです。この地上にあってこそ、人間は人間でいられるのです。神にあまりに近すぎること、死に性急におもむくことは、人間には許されていないのです。ここは、かなりわかりにくいところですが、ヘルダーリンの宗教心のもっとも含蓄のあるところですね。そして人間が神に忠実でありながら、しかも地上にとどまりつづけるためには、「人間らしさ」が必要です。この「人間らしさ」とは、「ことばの痕跡」であり、「よりどころ」のようなものです。この詩に即していえば、神の「名」であり、「姿」であり、「特性を示す名辞」であるでしょう。こうした名や姿、形、像をなかだちとして、ひとは神に近くありながら、同時に地上にとどまることができるのです。そうした名や姿、像を、この詩はさぐるうとしているのです。

・・・こうして三人みな同じなのだ。よろこばしく。青々としげる

三つ葉のクローバ。だから残念なのだ。もしこの三者についてだれか彼らが半神であると

公言するのをはばんだりすれば。見解はいろいろあろう。天上の皆さまと

生あるものはいつもとなりあっている。偉大な男も

天上にあってさえ地上のだれかにこがれる。いつでも

そうだ。日々世界はひとつの全体なのだ。しばしばしかし偉大なものがともにいて役立たぬかと思えることがある

別の偉大なものに。彼らはしかしいつでもあたたかも深淵にひとりひとり並びたつ。かの三者はしかし

いかなれば日のもとの

狩の獵人 もしくは

農夫 仕事からひと息つき

頭をむきだす もしくは乞食。

ほかの勇士らはそうでない。

論争がしかしわたしの心を

乱すのだが 神の息子たるものとして当面の必要から

あの三人は徴をおびているのだろう。というのも雷の神のはから

いは特別で

当を得たものだった。キリストはしかし分に安んずる。

先達はヘラクレス。バッカスは集いの精神。キリストはしかし最後のもの。おそらく性質がちがうのだ。しかし果たす

いまなお

他のふたりのところで天上の皆さまが果たせぬことを。

詩人は太古の記憶を胸に、いまの時代にもあらわれる神性のしるしをもとめて、くからくへとさまよう「門づけ」でした。そしてひとびとの心のなかで、いまにも姿かたちをとろうとする、あるいは、いまにも消えようとする神性を、ことばにしようとするのです。

・・・かの三者はしかし

いくなれば日のもと

狩の獵人 もしくは

農夫 仕事からひと息つき

頭をむきだす もしくは乞食。

ほかの勇士らはそうでない。

先達はヘラクレス。パッカスは集いの精神。キリストはしかし

最後のもの。

獵人や農夫、乞食の像がなにを意味するか、にわかにはいえません。それでもここには、年経り苔むしたものがもつような安らぎと、無邪気さ、稚気のようなものが感じられるでしょう。もしこうした神や半神がひとの心のなかで姿かたちをとれず、不定形のまま神性へのあこがれだけがふくれあがっていったならば、ひとびとはそのあこがれに身を投じ、おそれることなく死におもむくことになるでしょう。

この断片は、神々とひとびとの信仰について、また「門づけ」とし

の詩人の意義について、いろいろな想像を呼びだしてくれる、たいへん興味深いものです。この詩はついに完成しませんでした。ここにはヘルダーリンの晩年の詩のもつ、大きな可能性があったと思います。

ヘルダーリンの生きた時代、一八世紀末から一九世紀はじめにかけての十数年は、フランス革命の影響をうけ、ドイツは、いくども戦乱の災禍に見まわれました。激動と変革の時代であったのです。さらに、これは御存知のかたもいらっしやるかもしれませんが、ヘルダーリンは分裂病、いまいう統合失調症でした。分裂病そのものは、いろいろな症状があるようですが、ヘルダーリンの詩にとり、独特な意味をもつたものは、自己意識の急激な解体です。これは、一方では、ふつうではありえない意識のひろがりをはきおこしますが、他方では、一人のひと、一個の人間という個体意識を崩壊させます。つまりヘルダーリンは、死に急ぐひとびとの、死へのあこがれに、過敏に反応する用意があったわけです。

さきほど、神の名や姿、像をもとめるひとびとの信仰、また詩人のはたらきについて少し述べました。それが困難になり、神性とひとつになりたい、というあこがれが大きくなる状況を背景にして、ヘルダーリンはくりかえし詩を書いています。さいごに『ムネモシュネー』という詩を、そのさいしょの節だけですが、見てみましょう。ムネモシュネーとは、古代ギリシアの記憶をつかさどる女神のことです。

ムネモシュネー

火をくぐり煮つめられ 熟れた

果実 地の試練をうけ。そして掟は

なにもかも蛇のようにもぐりこむ

と予言する 天の丘

に夢見つつ。あまたのことが

肩に負う

薪のように

維持されねば。しかし 険しい

道。すなわち驛馬のように

荒らぶる囚われの

元素 また古い

地の掟。そしていつも

抑えがたく突きすすむ憧れ。あまたのことがしかし

維持されねば。そして必要なのは変わらぬ心。

しかし後をも先をもわれらは

見まい。むしろ揺すられるままに さながら

海にただよう小舟のように。

ときは、実りの秋です。だが豊かな実りというより、ここでの成熟は、陽に焼かれ、煮つめられ、試練をうけて、やっとおとずれる、かなりきびしい過程のようです。そして成熟のあとには、死がおとずれます。種全体としては、またつぎのサイクルをはじめのわけですが、個体はしかし、ほろびます。

しかしきびしい状況のもとでは、そうした自然な成り行きをこえて、成熟の過程をいわばとびこして、一足とびに死へとおもむこうとする

あこがれが、生きものの心を強くとらえることがあるのでしよう。荒くれ馬のように、原初に帰ろうする元素があり、また古い掟のたがはずれ、みな野放図にちらばって消えうせようとします。いっこくも早く初源へと、本源へと、死へと帰りたいというあこがれが、生きものの心をとらえます。だが、そこで、ふみとどまる必要があるのです。この地上にとどまり、一つひとつ過程を経てはじめて、死へとたどりつくのが人間の存在意義なのですから。「あまたのことが／肩に負う／薪のように／維持されねば」「あまたのことがしかし／維持されねば。そして必要なのは変わらぬ心」

節のさいこの三行は、いろいろなうけとり方があるようです。ここは、そうしたきびしい状況にあるからこそ、過去にたいしても、未来にたいしても、性急に予断を下したり、見切ったりすることなく、いまの不安定な状態に身をゆだね、この状況全体が展開するところを見きわめようという、本源的な受容性を告げているのだ、といった見方が、いちばんふさわしいのではないかと、わたしには思えます。

勝手な連想ですが、この部分は、わたしには、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ二十八番（作品一〇一）、第一楽章、ためらいがちに、つぎの音を手さぐりするような短い展開部を思いおこさせます。

二、見つめること

豹

つぎつぎよぎる鉄柵のため目は

疲れもうなにも見えない。

まるで千もの棒があり
千もの棒のむこうには世界などないかのよう。

アシャンティ

しなやかで強靱な歩みの柔らかな足どりは
きわめて小さな円をえがき
それは大きな意志がしびれて立つ
ひとつの中心をめぐる力の舞踏のようだ。

これは異国の幻想じゃない。
衣裳ふりおとしておどる
褐色の女たちの気もちじゃない。

ただときおり瞳のとばりが
音もなくあがる。——するとなにか姿がはいりこみ
四肢の張りつめた静けさをとおりぬけ
やがて心のなかに消えてゆく。

野性のあやしい旋律でなく
血をさかのぼる歌でもなく
深みより叫ぶ血でもない。

これはリルケの代表的な詩のひとつです。

熱帯のものうさにピロードのように
身をひろげる褐色の乙女じゃない。
武器となり火を吹く目でもない。

この詩の核心は、二節目のうしろ二行にあります。

その口はすでに高笑いの用意ができています。

それは大きな意志がしびれて立つ

奇妙にも白い肌の

ひとつの中心をめぐる力の舞踏のようだ。

虚栄心に通じているのだ。

この二行に達するために、じっと檻のまえに立ち、豹を凝視する詩人の姿が思いうかびます。もちろん、これは想像ですが。ほんとうのところは、一瞬でさっと見ぬき、あとで推敲をかさねたのかもかもしれません。しかし、いづれにしても、ここにはおそろしいほどの意識と意志の集中があります。そのことは、たぶんこの詩とあまり成立時期のちがわない、つぎの詩と比較してみれば、よくわかります。

わたしは見ていて不安になった。

おお動物のほうがなんと誠実であることか。

格子のなかをいったりきたり

理解できずなじめもしない

目新しい騒ぎとは折り合いもつけず

静かな炎のようにひっそり

燃えつき自分のなかに沈みこむ。

新たな事件には心ひかれず

ひとり自らの偉大な血とともにいる。

アシャンティとは、アフリカ西部の地名のことで、ここでは、そこからきて、パリで公演している歌舞の一団のことだそうです。

駝鳥をめぐる有名な高村光太郎の詩がありますが、あの詩は高村の悲憤慷慨を伝えて体をなしていますが、このアシャンティの詩は、残念ながら、たんなる感想におわって、詩とはなっていません。アフリカの踊り手の墮落と比較して、動物の野性の気高さをたたえようとしているのですが、この程度のことなら、檻にはいった動物を實際に目にせずとも書けたでしょう。つまりこの詩では、リルケは動物など見ていないのです。

それについて、『豹』という詩では、詩人は豹を見つめています。凝視のはげしさは、豹をいわば透視せんとするほどのものです。檻のなかで、おちつきなく、小さな円をえがき、いらだつように歩きまわる豹を透して、しびれたように立つ大きな意志と、それをとりまく力の舞踏を見ているのです。

そしてここまで見通したとき、この豹の姿は、詩人自身の姿と重ねることになるのです。豹とは、詩人の自画像でもあるのです。

盲人

ごらん 盲人がゆく。街を断ちきる。

その暗い足もとに街は消えている。

明るい茶碗に暗いひびが

はしるようだ。そして一枚の紙となって

盲人のうえに ものの反射が

えがかれる。だがわが身にとりこむことはない。

ただ触手がうごき 世界をうけとめ

こきざみな波動にかえている

これは静寂 これは障害 と――

それから期待をこめ だれかを選びだすように

身も心もささげて手をあげる

おごそかに ほとんど花嫁をめとるかのよう。

これは盲人がパリの街を横ぎってゆく様子を見つめたものです。杖をついて道をわたるのでしょうか、「ただ触手がうごき」といわれています。

しかしこの詩は盲人の動作を描写しようとしているわけではありません。杖をついて歩む手／うたい手の視線は、というより、内面の感覚は、盲人が街を横ぎってゆくとき、見ている人々が、また街そのものが感じとる、ある種のまがまがしさに注目しています。

明るい茶碗に暗いひびが

はしるようだ。

人々は一瞬はつとして道をあけるのでしょう。そして、なにか異物でものみこんだふうな気がして、盲人がとおりぬけてゆくを見送るのです。

それから期待をこめ だれかを選びだすように
身も心もささげて手をあげる
おごそかに ほとんど花嫁をめとるかのよう

盲人のうごきに、人々はいささか気圧されたかのぐあいです。ここでは盲人が状況を支配しているかのようです。

群集

花をつんで手早くたばねるひとのように
偶然があわただしくいくつもの顔をとのえている。
束をほどき またきつくしめ
遠くの顔をふたつとり 近くのをひとつすてる。

あれとこれをとりかえ べつの顔には生気を吹きこむ。
雑草をひきぬくように犬を束から追いだし
かがんだ頭を 折れ曲がった
茎や葉のなかからとりだすように手前にひきだし

さりげなくへりにとめる。

そしてふたたび手をのばし とり変えたり移したり
そして一瞬 たしかめようと

まんなかのマットのうえにとびしさる。
つぎの瞬間 そこではむっちりした
重量あげがさらに重いものもちあげる。

まえのふたつの詩とは異なり、この詩では、詩の語り手／うたい手と対象の関係は、かなり距離のあるものです。ここには、ひそかな共感も、まがまがしさの感受もありません。わきの建物の上階から、広場のだしものを見下ろしている、といったところでしょうか。いや、むしろ、もっと積極的ないい方をしますなら、見るひとは、カメラ・アイになりきって、下の出来事をながめているのでしょうか。リルケはパリで、映画を見たのでしょうか。上から見下ろされた群集の、数分間のドキュメント、といったおもむきです。こうしたカメラ・アイを思わせる詩は、当時としては、たいへんめずらしいものであったろうと思います。しかも、それを作った詩人が、繊細な内面の感受性の代表ともふつうみなされている、あのリルケであるというのは、おもしろいところです。

群集のうごき全体が、偶然の編む花束にたとえられています。これは人間の意志をこえた偶然の力を、えがきだそうとしたものでしょうか。それとも群集のうごきを見ていたら、たまたま偶然の力に思いいたったのでしょうか。ここが奇妙に中途はんばな印象をうけません。偶然のつくる花束というたとえなしで、群集のうごきをさらに冷

徹に見ぬく目があったなら、リルケには、またべつな詩の道がひらけていたかもしれません。

リルケにとり、見つめる、ということとは、目に見える形や様子をうつしとることではなく、むしろ目に見えないものを透視することであつたのでしよう。目に見えないものは、ことばとなって、浮上してきます。

しかし、しびれた大きな意志をめぐる力の舞踏や、茶碗のひびわれのようなまがまがしさを透視することは、見るひとにとって、けつして幸福な行為ではなかったでしょう。むしろ狭い石壁のあいだを無理して通りぬけるような、息苦しい活動であつたと想像されます。しかし見つめることが、見つめるひとの内面の豊かさをくみだすような詩もあります。

これが、そうです。

果実

それは地中から実りを目ざしてのぼりにのぼつた。

そして静かな幹に黙りこみ

あざやかな開花とともに炎となって

そしてふたたび静かになった。

ひと夏のあいだ夜も昼も

やすみなくいそむ樹木のなかで成熟し

みまもりつづける周囲にむかつて

やがて殺到するわが身をさとつた。

そしていまやまるまるした楕円の

ふくらみを見せ円熟を誇ると

それはすべてを断念し果皮のうちの

自らの中心にすべりおちてゆく。

これは、まえの三つの詩よりも、ずっと後年の詩です。

「それ」とは、実りの力のようなものでしょう。土のなかから上昇し、花となってひらき、果実のかたちをとり、そしてふたたび種子へともどってゆくのです。これは見るひとの心のはたらき、創造のはたらき、そのものです。ひとの心のはたらきは、これほどむだがなく、美しいばかりでもないのですが、見るひとは、自分の夢を、果実の実に見ているのです。

リルケの詩、とくにパリ時代の詩には、おそろしいほどの集中があります。その集中は、対象である「もの」に、いわば呼びかけられるようにしてひきおこされるのでしよう。はたらきかけてくるものに、すっかり身をさらすことになるわけです。こうした一つひとつの、息をひそめるような集中のつきかさねが、ひとときつづいたのち、ある時点で、ひとつの転回があつたと想像されます。これまで見つけてきたものが、ふいに、記憶のなかによみがえる瞬間がおとずれたのでしよう。遠いむかしに出会つたものも、ただ聞いたたり読んだりしただけだったものも、すでに忘れてしまったと思ひこんでいたものも、生きていたものも死んでいるものも、なにもかも、記憶のひろがりのかに、いっきによみがえってきたのです。

・・・だれが

われらをすぎし昔の年からへだてよう？

はじめからわれらの体験とは なにがあるろう？

一つのもが別のもののおのれを知り

ささやかなことがわれらのところで暖まる以外には？

おお家よ おお牧場の丘よ おお夕べの光よ

ふいにおまえは顔となり

われらのもとに立つ 抱きまた抱かれて。

あらゆるものをつらぬいて ひとつの空間がある

世界内面空間が。鳥たちは音もなく

われらのなかを飛ぶ。おお わたしが成長しよう

そとを見る するとわたしのうちに木が育つ。

「世界内面空間」とは、ことばの空間です。そこには死と生の区別はありません。これはリルケという詩人にとっては、生涯の到達点と思えたかもしれません。しかしこれはまた、ゆきどまりの地点でもあります。この詩の空間からは、どこにも、ゆくところがないのです。

ヘルダーリンの場合も、記憶は重要なものでした。「門づけ」である詩人は、神の姿や特性の記憶を保ち、門ごとにうたってあるのです。でも詩や歌をつくるのが、到達点ではないのです。それによって、ひとびとが、死にいそぐのを思いとどまり、この地上にあって、ひととして生きぬいてゆけるための詩であり、歌なのです。ここには、詩

からの帰りみちがあるのです。

また、つぎに読んでみますツェランも、たくさんの方の死者の記憶をかかえています。ナチスの強制労働所でなくなった父母は、「世界内面空間」に安んじてとどまることができずしょうか。なかなか、むつかしいでしょう。それでは、ツェランの詩は、どこに向いたらいいでしょう。どこに、帰ることができずしょう。これは、うまくは答えられません。

三、黒いミルク

死のフーガ

朝まだきの黒いミルクぼくらはそれを晩にのむ

ぼくらはそれを昼にのむ朝にのむぼくらはそれを夜にのむ

ぼくらはのむそしてのむ

ぼくらは空中に墓をほるそこは寝るのに狭くない

男がひとり家にすむ男は蛇とたわむれる男は書く

男は書く暗くなるとドイツにあてておまえの金の髪マルガレーテ

男は書くそして家の戸口にでる星がきらめく男は口笛で獵犬を呼

びよせる

男は口笛でユダヤ人を呼びよせる地面に墓をほれという

男はぼくらに命令するそれ舞曲をかきならせ

朝まだきの黒いミルクぼくらはおまえを夜にのむ

ぼくらはおまえを朝にのむ昼にのむぼくらはおまえを晩にのむ

ぼくらはのむそしてのむ

男がひとり家にすむ男は蛇とたわむれる男は書く

男は書く暗くなるとドイツにあてておまえの金の髪マルガレーテ
おまえの灰の髪ズラミートぼくらは空中に墓をほるそこは寝るの
に狭くない

男はさけぶおまえらもつと深く地面をほれおまえらはうたえかき
ならせ

男はベルトにはさんだ鉄棒をつかむそれをふりまわす男の目は青
おまえらもつと深くすきかえせおまえらは舞曲をつづけろ

朝まだきの黒いミルクぼくらはおまえを夜にのむ

ぼくらはおまえを昼にのむ朝にのむぼくらはおまえを晩にのむ
ぼくらはのむそしてのむ

男がひとり家にすむおまえの金の髪マルガレーテ
おまえの灰の髪ズラミート男は蛇とたわむれる

男はさけぶもつと甘く死をうたえ死はドイツのマイスター

男はさけぶもつと暗くヴァイオリンをかきならせそうすればおま
えらは煙となって空中にたちのぼる

そうすればおまえらは雲のなかに墓をもつそこは寝るのに狭くな
い

朝まだきの黒いミルクぼくらはおまえを夜にのむ

ぼくらはおまえを昼にのむ死はドイツのマイスター

ぼくらはおまえを晩にのむ朝にのむぼくらはのむそしてのむ

死はドイツのマイスターその目は青

それは鉛の玉でおまえをうつそれはおまえにびたりとあたる
男がひとり家にすむおまえの金の髪マルガレーテ
男は獵犬をぼくらにけしかける男はぼくらに空中の墓を贈ってく
れる

男は蛇とたわむれるそして夢見る死はドイツのマイスター

おまえの金の髪マルガレーテ

おまえの灰の髪ズラミート

訳もそうですが、ドイツ語の原文を一読、気づくのは、文をくぎる
ピリオドがなく、同じいいまわしが、くりかえしてくることです。

ツェランは「死のポレロ」「死のタンゴ」といった題名も考えていた
ようです。いつまでもやむことのない、しかもなにも新しい展開の
ぞめそうもない、単調なリズムが、この詩の本質です。

詩の場面は、命令するドイツ人と墓をほるユダヤ人がでてくるとこ
ろから、ナチスの強制収容所や強制労働所が想定されていると考えて
いいでしょう。ツェラン自身、さきほど申しましたとおり、強制労働
所で父と母をなくしたと推定されています。ツェラン自身は、間一
髪、難を逃れたようです。

「黒いミルクをのむ」という衝撃的な句については、前々回、少し
お話しました。

「ミルクをのむ」とは日常生活全体、人間のふつうの生活のいとな
み全体、ひとが生きていることそのものの代表です。つまり換喩です。

その「ミルク」に「黒い」という形容矛盾がつくことにより、おそれなく、日常生活全体、ひとの生きることそのものが、いわば陰陽、うらがえてしまうのでしょうか。死の世界、あるいは死にひとしい、ときには死以上に過酷で無意味な世界ということでしょうか。

さて場面が収容所ですから、「黒いミルク」をのむ「ぼくら」は、そこに収容されているユダヤ人だと、ひとまづは、そう思えます。ただ「黒いミルクをのむ」といういいまわしは、さらに連想を呼びます。黒いミルクをのんでいるのは、死者たちではないでしょうか。死にきれない死者たちが、黒いミルクをのんでいるのではないのでしょうか。

また「黒いミルクをのむ」というのは、収容所の死者たちを記憶にかかえて生きる、いまの「ぼくら」ではないでしょうか。黒いミルクをのむ、とは死んでいったものたちをしのいで、思いおこす、心のかたで死者たちと、ひとつになろうとする行為ではないでしょうか。

この詩の「ぼくら」には、いくつもの世代と人間関係とが重ねあわせられているようです。

この詩は、戦後書かれた詩としては、おそらくもっとも有名になったものでしょう。有名になりすぎたといっているかもしれません。戦後のドイツ人は、この詩をどう読んだでしょうか。なかなかデリケートなところですよ。

ツェランの詩は、読んでよくわからないものが多いのですが、一息つくように、チャーミングな小詩をひとつ。

ポブラよ おまえの葉は暗がりにも白くかがやく

ぼくの母の髪の毛は白くならなかった。

たんぽぽよ ウクライナは緑。

ぼくのブロンドの母はもどらなかつた。

雨雲よ 泉のふちにためらうか？

ぼくの母はそっとみんなのために泣く。

まるい星よ おまえは金の輪をむすぶ。

ぼくの母の心臓は鉛の玉で傷ついた。

柏の扉よ おまえの蝶番をはずしたのはだれ？

やさしい母はやってこられない。

ごらんのとおり、母をしのぶ歌です。

ポブラ、たんぽぽ、雨雲、まるい星、目にする草花、空や雲、なにかもが母のいないことを告げるのです。

ツェランの生まれたブコヴィナ地方は、現在ではウクライナですが、戦前はオーストリア・ハンガリー帝国の文化圏でした。その中心都市ツェルノヴィツで政治・文化を支配していたのはドイツ人でしたが、ある程度資産のあるユダヤ人もドイツ語を母語とし、ドイツ文化に同化しようとしていました。ツェランの母はドイツ語にたくに深い愛着をもっていたようです。ドイツ語はツェラン、本名パウル・アンチェルにとり、文字どおり、母語だったわけです。ツェランはことばの達人で、何か国語も自由にあやつたそうです。たとえば同級生がロシア語の初級でひいひいしているときに、彼はもうトルストイの『戦争と平

和』を読みすすめていた、というエピソードもあります。戦後はセー又川へ投身自殺するまでパリにくらしていました。数々の詩の翻訳があります。それでも、詩はさいごまで、ドイツ語で書かれました。

この甘く、しかも苦いところのある小詩は、シュールレアリスムと表現主義を仲だちにして、ハイネの詩を思わせます。ハイネの詩も、またべつな意味で、甘く、そしてしたたかに苦いものです。

数えよ アmendウを

数えよ 苦くおまえを眠らせなかったものを

数えいれよ わたしを。

わたしはさがした おまえの目を おまえが目をあけだれもおま

えを見ていないときに

わたしはつむいだ 秘密の糸を

それをつたっておまえの思いの露が

いくつもの甕のなかにすべりおち

その甕をことばが だれの心にもかつてとどいたことのないこと

ばが守っている。

そこではじめておまえはおまえそのものの名のなかに歩み入り

たしかな足どりでおまえ自身に歩みより

おまえの無言の鐘楼では槌が自由に鐘をつき

耳そばだてはじめてわかることがおまえ目がけてとんでくると

死せるものもおまえを腕に抱きよせた。

そしておまえたち三人は夕べのなかを歩いていった。

苦くせよ わたしを

数えいれよアmendウに わたしのことを。

この詩も、よくわからないところがあります。

アmendウ、アモンドがでてきます。アmendウは「おまえ」には苦く、そして「おまえ」を目覚めさせておき、眠らせないものだった、といわれています。

旧約聖書のイエレミア書には、こうあります。

イエレミア、なにが見える、と主がたずねます。アモンドの枝です、とイエレミアはこたえます。そうだ、わたしは、わたしのことは見はっているのだ、と主がいいます。これはヘブライ語で、「アモンド」を意味することばと、「見はる」を意味することばとが似ているところからくる問答のようです。アモンドは見はっているのです。アモンドに見はられて、「おまえ」は目をさましていうことになるでしょうか。「わたし」を数えいれよ、とは、「わたし」をそのアモンドにしてほしいということでしょうか。

アmendウは、苦く、そしてひとを眠らせないものといわれています。迫りくる危機のなかで、覚悟して、なにものかを待ちうける姿勢を感じさせます。そうした緊張のなかで、「わたし」は「おまえ」と結びつきをつくるのです。——「わたしはさがした おまえの目を」「わたしはつむいだ 秘密の糸を」

「わたし」が「おまえ」にひそかに結ばれたとき、はじめて「おまえはおまえそのものの名のなかに歩み入り」「おまえ自身に歩みより」

「槌が自由に鐘をつき」「耳そばだてはじめてわかること」がとんできて、「死せるものもおまえを腕に抱きよせた」のです。こうして「おまえたち」は三人してあるいていった。たぶん、なにごとかが成就し、あるいは、ひょっとして、「おまえ」も安らかに眠りにつくことができるのではないのでしょうか。少なくとも、そう希求することだけではできるとは思いません。

アモンドウは「おまえ」には苦く、「おまえ」を目ざめさせておくものでした。だがその苦さと不眠、不安とともに担うことによってはじめて、「わたし」は「おまえ」と結びつくことができるでしょう。アモンドウといえば、粒のそろったあの種子をまづ思いうかべるのですが、その粒の集合というところから類推しますと、アモンドウとは、共同性の符牒ではないのでしょうか。苦く、ひとを眠らせない記憶をかかえたその共同性に参入することを、詩の語り手／うたい手は祈念しているのではないのでしょうか。

ここにとりあげた三つの詩は、まだ若いときのものです。生きのびて、その後の生を死者によりそいつづけるといえるのは、どうでしょう。想像を絶します。「わたし」と「おまえ」とのこうした結びつきを、なにがささえつづけてくれるのでしょうか。よくわかりません。さいごに、旧約聖書のことばにもとづく、これまた有名な詩を引用しておきます。

詩篇

誰でもない方がふたたびぼくらを土と粘土からこねあげる
 誰でもない方がぼくらの塵に息を吹きこむ

誰でもない方が。

称えられよ 誰でもない方よ。

あなたのために

花咲こう ぼくらは。

あなたに

むかって。

ひとつの無

でぼくらはあった いまもそうだ これからも

そうだろう 花咲きながら

無の

誰でもない方の薔薇。

ひたすら

魂の明るさの花柱をもち

天の荒野の花糸をもち

緋色のことばの赤い花冠を

もちながら ぼくらはうたった そのことばを

いばらの おお

いばらのうえで。

(二〇〇四年十月から十一月にかけて公開講座『ドイツの詩と小説』を六回おこないました。これは詩について担当した三回のうち、第三

回の講義のために準備したものです。参考のため、当日朗読した三つの原詩をつぎにのせておきます。ヘルダーリン『ムネモシユネー』第一節、リルケ『豹』、ツェラン『死のフーガ』第一節、第二節)

Mnemosyne

(Hölderlin)

Reif sind, in Feuer getaucht, gekochet
Die Frücht und auf der Erde geprüft und ein Gesetz ist,
Daß alles hineingeht, Schlangen gleich,
Prophetisch, träumend auf
Den Hügeln des Himmels. Und vieles
Wie auf den Schultern eine
Last von Scheitern ist
Zu behalten. Aber böse sind
Die Pfade. Nämlich unrecht,
Wie Rosse, gehn die gefangenen
Element' und alten
Gesetze der Erd. Und immer
Ins Ungebundene gehet eine Sehnsucht. Vieles aber ist
Zu behalten. Und not ist die Treue.
Vorwärts aber und rückwärts wollen wir
Nicht sehn. Uns wiegen lassen, wie
Auf schwankem Kahne der See.

Der Panther

(Rilke)

Sein Blick ist vom Vorübergehn der Stäbe
so müd geworden, daß er nichts mehr hält.
Ihm is, als ob es tausend Stäbe gäbe
und hinter tausend Stäben keine Welt.

Der weiche Gang geschmeidig starker Schritte,
der sich im allerkleinsten Kreisen dreht,
ist wie ein Tanz von Kraft um eine Mitte,
in der betäubt ein großer Wille steht.

Nur manchmal schiebt der Vorhang der Pupille
sich lautlos auf —. Dann geht ein Bild hinein,
geht durch der Glieder angespannte Stille —
und hört im Herzen auf zu sein.

Todesfuge

(Celan)

Schwarze Milch der Frühe wir trinken sie abends
wir trinken sie mittags und morgens wir trinken sie nachts
wir trinken und trinken
wir schaufeln ein Grab in den Lüften da liegt man nicht eng
Ein Mann wohnt im Haus der spielt mit den Schlangen der schreibt
der schreibt wenn es dunkelt nach Deutschland dein goldenes Haar Margarete
er schreibt es und tritt vor das Haus und es blitzen die Sterne er pfeift seine Rüden herbei
er pfeift seine Juden hervor läßt schaufeln ein Grab in der Erde
er befiehlt uns spielt auf nun zum Tanz

Schwarze Milch der Frühe wir trinken dich nachts
wir trinken dich morgens und mittags wir trinken dich abends
wir trinken und trinken
Ein Mann wohnt im Haus der spielt mit den Schlangen der schreibt
der schreibt wenn es dunkelt nach Deutschland dein goldenes Haar Margarete
Dein aschenes Haar Sulamith wir schaufeln ein Grab in den Lüften da liegt man nicht eng